

野鳥たより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 119 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成12年 3月21日

コシジロアジサシ



1999. 8.29 小樽市新川河口付近 撮影者 渋谷 信 六

〒063-0012 札幌市西区福井8丁目9-2



もくじ

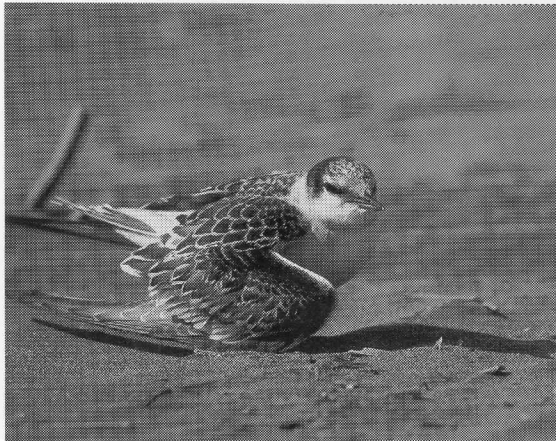
迷子のコシジロアジサシ	渋谷 弘子	2
庭に飛来した野鳥	早瀬 廣司・富	3
温根沼という穴場に迫る道路問題	高田 令子	8
マガンの日本最北最大の中継地「宮島沼」の現状と課題	田辺 至	9
死体とおつきあいするいくつかの方法	佐藤 雅彦	12
鵜川河口でズグロカモメを観察	佐藤ひろみ	13
探鳥会ほうこく		13
「藤の沢探鳥会」30年を振り返って	小堀 煌治	15
鳥民だより		15
探鳥会あんない		16

迷子のコシジロアジサシ

渋谷 弘子

新川河口から石狩方向へ2 km余りの海岸沿いは魅力のある所です。

1999年8月29日、河口でSさんと出会う。鳥が少ないから生振方面へ行くとのことだ。昨夜からのキャンパーが点在する中、石狩方向へ車でゆっくり走り出す。ウミネコ、オオセグロカモメが見られるのみだ。1 km程走って人影のきれ間にきた時、1羽の鳥が低く飛んで来て擦れ違った。「アジサシだね。」と主人と話しながら前進。シギ達を見て引き返すと車の前方から1羽が飛び、50~60m先方へ下りる。先程のアジサシの様だ。車で静かに近づく。今まで見たことの無い鳥だ。



右肩を痛めているようだ...

7 m位の所まで接近したが身動きもせず、じっとしている。時々澄んだ淋しげな声で「チュイリー、チュイリー」と二、三声鳴く。頭が大きく、目がとても可愛い。何となくあどけない顔をしている様に見える。主人は、「なんだ、なんだ」と云ってバシャ、バシャ、とシャッターを切っている。図鑑を見るとコシジロアジサシの幼鳥によく似ている。頭は黒褐色、背・翼は黒褐色で白い羽縁がある。足は黄橙褐色。右肩を痛めている。車が来て飛

び立った。腰は白い。喉から腹にかけて真っ白で美しい。一度海面に下りたが餌を採る様子もなく又戻って来た。人影の無いこの辺が好きらしい。肩を痛めている為か長く飛んでいられない様子だ。しばらく休んでから又飛び

回る。そして下りては「チュイリー、チュイリー」と鳴き、親を探している様にも見えたが、他にアジサシの姿は見られなかった。1時間余り見ていたが車が来て飛び去った。チゴハヤブサがトウネンを追っていたので捕獲されない様無事を祈って見送った。翌日、翌々日と行って探してみたが姿は見られなかった。

〈広報部註〉 コシジロアジサシは日本では北

海道(1980)、宮城(1931)、千葉(1890、1985)、神奈川県(1969、1988)、静岡(1969)、新潟(1986)で記録があります。北海道の記録は1980年8月の根室・春国岱で、成鳥1羽と幼鳥1羽です。公表されたものとしては、全国的には1988年(神奈川県)以来の11年ぶりになり、また北海道では19年ぶり、2例目の記録です。

〒063-0012 札幌市西区福井8丁目9-2

庭に飛来した野鳥

早瀬 廣司・富

私の住宅は札幌国道と琴似本通りの交差点より東（札幌側）に100mの山の手高校通りを南（山側）に300m行き、角から東の北風公園側の3軒目で公園に30m離れている。敷地は200坪で1954（昭和29）年以後植えたカシノミ（以下クルミと略す）、オンコ、モミジ、バンクスマツ、ギョリュウ（御柳）、ナナカマド、カイドウ等が成長して大きくなり、なかでもクルミは2階の建物より高くなり、野鳥が休む適当な木に育っている。

野鳥の種類

家を改築した翌1988年1月から1999年9月まで庭で見られた野鳥を報告する。菅野寿衛吉さん（西区山の手4-5-7）のお宅の庭には1978年前後までに約50種の野鳥が来たとのことである（野鳥だより42号、1981）。私の家の庭には1955年6月、ナシの木にカッコウがきた。1980年前後の冬には三角山からコウライキジがよくきた。また向いの空地には雑木が生え、竹藪になっていて毎年春にはウグイスが来て囀った。その後急激に宅地化が進み、畑であったところも宅地となり、宅地の大きな木は伐採されて野鳥の住みにくくなった最近12年間の記録である。なお、文中の写真はすべて私が撮影したものである。

毎年12月末か1月初めに、豚肉の脂身、ヒマワリの種子、リンゴ等の餌台を設置してきた。

野鳥の種毎に飛来回数（頻度）を5段階に分け、年度別にまとめて第1表に示した。A：50日以上、B：20-49日、C：10-19日、D：5-9日、E：1-4日とした。但しその日数はレンジャク類のように1日の中に何十羽の群れが何回飛来しても、1羽が1回のみの飛来でも同じ1日として計算している。

12年間を通して年間で飛来頻度の最も高い野鳥はヒヨドリで、次いでツグミ、シジュウカラ、シメ、カワラヒワ、ムクドリ順になった。しかもレンジャク類の飛来の多い1-5月までの頻度（1-5月の151日間で、飛来した日数の割合）は、リンゴを餌とするヒヨドリ、ツグミ、シメ、ムクドリが80%以上であるのに対し、ヒマワリを餌とするシジュウカラ、カワラヒワは55-60%で、これらの野鳥は10-12月に秋に実ったヒマワリの種子を食べる習性の違いによるのか。シメはリンゴも食べるが、ヒマワリを好むのであてはまらない。

レンジャク類

冬鳥の中で最も美しく魅力的な野鳥はレンジャクであ

ろう。レンジャクの飛来数は1日に何十羽が何回も来て100羽を超えることがある。キレンジャク、ヒレンジャクともに飛来しなかった90年、92年、94年の3年を除き、それぞれの羽数を6段階に分けて飛来日数を第2表に示した。AA：101羽以上、A：51-100羽、B：21-50羽、C：11-20羽、D：6-10羽、E：1-5羽とした。キレンジャクに比べ、ヒレンジャクの飛来の多い年は1988年と1995年の2年だけで、他の6年はキレンジャクの方が飛来日数、飛来数ともに多かった。なお、1999年3月には両種ともが飛来したが、識別困難であったため表からは除き、それについては後述する。

1989年はキレンジャクの大群が1月中旬から5月初めまで飛来し続け、1日に何十羽の群れがクルミの木、電線、アンテナ等からリンゴの餌台に交互に降りてきて競って食べた。それで餌のリンゴ7-10個を半切りにして1日に3-5回補給した。その結果くずリンゴ15箱以上消費した。そのせいか、リンゴを主として餌とするヒヨドリ、ツグミが著しく少なくなり、ヒマワリ種子を餌とするシジュウカラ、カワラヒワも少なくなった。ハイタカがレンジャクを餌としようと飛来してきたり、猫がレンジャクを捕えようと1月1回、3月2回も出てきたりもした。コムクドリが4月29日に渡ってきて繁殖のため巣箱に定着しようとしたが、5月に入ってもキレンジャクの群れに加えて、ヒレンジャクも群れて来るようになり、定着できなかった。5月6日巣箱の近くにあったリンゴの餌台を移動して15m離れた塀の近くに、リンゴの餌を半減したところ、コムクドリの番いは5月20日に巣箱に定着して漸く巣材運びをすることができるようになった。

冬の初め11月-12月にレンジャクが飛来した年は1988年と1996年の2年で、1988年はヒレンジャクのみで11月21日に70羽の群れ、12月5日に50羽の群れ、12月10日には200羽の大群が山の手バス通りで見られた。1996年はキレンジャク、ヒレンジャクの両種が飛来したが、この年は例年と異なり、札幌近郊のナナカマドの赤い実は全く稔らなかった。そのためナナカマドの実のある年には見向きもしないオンコの赤い実を食べた。庭の道路沿いのオンコの実を食べに来たキレンジャクは通行人に驚いて飛び立ち、窓ガラスに衝突して死亡したのが11月12日、20日、21日の3回あった。

レンジャクが食べる木の実にはナナカマドの実のほかに、イヌツゲの黒い実、メギの実があり、普通はベニシタン

の赤い実は見向きもしない。ところが1998年の4月15日、16日にヒレンジャクがリングとベニシタンの間を移動しながらベニシタンの実を食べた。15日には、丁度ベニシタンの実を食べている時通行人に驚き窓ガラスに衝突して不幸にも死亡してしまった。

1998年3月山の手バス通りの並木のナナカマドの実他野鳥に食べられてほとんど残っていなかった。キレ

ンジャクにヒレンジャクが混じった群れは並木の間を往復しながら、下に落ちたナナカマドの赤い実を一所懸命に食べていた。また山の手高校向いの家の庭のリングを食べていた。それで庭にたくさんリングをつけたところ、クルミの木、電線、アンテナに3月中旬から3回、10～20羽の群れが来て、3月31日に漸く庭のリングにヒレンジャク1羽の混じったキレンジャクの群が飛来した。

第1表 庭に来た野鳥 (1988-1999)

科名	種名	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	計	A	B	C	D	E
シギ	ヤマシギ									E				1					1
タカ	トビ	E	E		E		E	D	E	E			E	8				1	7
	ハイタカ	D	D	E	E	E	E	E	E	E	D		E	11				4	7
ハト	キジバト	C	E	D	E		E	E			E			7			1	1	5
	ドバト							E	D	D				3				2	1
カッコウ	ツツドリ				E									1					1
キツツキ	ヤマゲラ				E									1					1
	アカゲラ	B	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	E	12		1	8	2	1
ツバメ	種不明								D		E			2				1	1
セキレイ	ハクセキレイ	D		D	E		E	D	D		E			7				4	3
ヒヨドリ	ヒヨドリ	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	12	12				
モズ	モズ	E	E			E		E		E	E		E	7				1	6
レンジャク	キレンジャク	E	A		A		A		E	B	A	E	D	9	4	1	1	1	2
	ヒレンジャク	A	D		B		B		B	B	C	B	E	9	1	5	1	1	1
ミソサザイ	ミソサザイ					E								1					1
ツグミ	ノゴマ					E		D	E	E	E	E	D	7				2	5
	コルリ											E		1					1
	クロツグミ											D		1					1
	アカハラ						E	E						2					2
	マミチャジナイ					E				E				2					1
	ツグミ	A	D	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	12	11			1
	(ハチジョウツグミ)						E		E	E				3					3
ウグイス	ヤブサメ								E					1					1
	ウグイス	E			E		E	E				E		5					5
	センダイムシクイ					E	E		E		D		E	5				1	4
	キクイタダキ					E								1					1
ヒタキ	キビタキ	E	E			E								3					3
	オオルリ											E		1					1
	エゾビタキ					E		E						2					2
	コサメビタキ				E		E	E	D	D			E	6				2	4
シジュウカラ	ハシブトガラ				E			E		C	A	B	E	6	1	1	1		3
	ヒガラ									E	E			2					2
	ヤマガラ								C	E	C	D	E	5			2	1	2
	シジュウカラ	B	B	A	D	E	A	A	A	A	A	B	C	12	6	3	1	1	1
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ								B	B			2		2				
メジロ	メジロ							E	D				2					1	1
ホオジロ	ミヤマホオジロ							E						1					
	アオジ		E	E	E	D	E	E				D	E	9				2	7
アトリ	アトリ	A		B	E		B	C	B	C	E	A		9	2	3	1		3
	カワラヒワ	A	E	B	B	B	A	A	A	A	A	A	A	12	8	3			1
	マヒワ	E	D				C		E					4			1	1	2
	ベニヒワ		E											1					1
	キンザンマシコ				E	D								2				1	1
	イスカ		E					E				D		3				1	2
	ウソ	E			E				E	E	E		E	6					6
	イカル	E												1					1
	シメ	A	B	B	A	A	A	B	A	A	A	A	B	12	8	4			
ハタオリドリ	スズメ	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	12	12				
	ムクドリ	A	D	B	B	E	B	B	A	B	A	D	E	12	3	5		2	2
カラス	コムクドリ	A	A	A	A	B	A	C	A	A	A	A	B	12	9	2	1		
	カケス		E											1					1
	ハシボソガラス	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	12	12				
	ハシブトガラス	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	12	12				
飛来種計		23	23	15	27	22	24	27	26	29	27	22	23						

A: 50日以上 B: 20-49日 C: 10-19日 D: 5-9日 E: 1-4日

第2表 レンジャク類の飛来した年、月、群れの大きさ別の日数

キレンジャク

年	月	AA	A	B	C	D	E	合計	1月	2月	3月	4月	5月
1988	3月				1	1	1	3			3		
1989	1-5月	65	14	37	4	2		122	23	29	31	26	13
1991	3-5月	15	14	14	12	8	1	64			24	27	13
1993	3-4月		3	16	10	6	3	38			19	19	
1995	3月					1	1	2			2		
1996	1-5月		3	3	4	6	9	25	1	5	2	9	8
	11-12月			3	8	1	4	16					
1997	1-4月	9	24	27	10	2	19	91	19	28	25	19	
1998	4月					1	3	4				4	

ヒレンジャク

年	月	AA	A	B	C	D	E	合計	1月	2月	3月	4月	5月
1988	3-5月		3	26	11	9	5	55			4	30	21
1989	5月			5		3	2	10					10
1991	3-5月	2	3		4	13	19	41			22	14	5
1993	3-4月				1	2	8	11			4	7	
1995	2-5月		1	5	6	2	5	19		2	2	6	9
1996	4-5月		1	4	1	4	6	16				9	7
	11-12月			1	4	1	1	7					
1997	2-4月						8	8		5		3	
1998	4-5月			9	6	10	3	28				20	8

1日に飛来した数 AA:101羽以上、A:51-100羽、B:21-50羽、C:11-20羽、D:6-10羽、E:1-6羽

注1:1996年11-12月のキレンジャクは11月8日と12月8日

注2:1996年11-12月のヒレンジャクは11月5日と12月2日

ツグミの中に

ツグミの群れが庭のカイドウの実を頻繁に食べに来たが、その中にハチジョウツグミが混じっていた(93年2月8日、19日;95年12月22日、26日)。また98年の初冬、ツグミの群れの中に眉斑のないクロツグミの雌らしい野鳥が連続して6回も観察できた。

3月末から4月初め、リンゴを食べに飛来する野鳥が減少する頃、単独の憶病なツグミが見られる。ツグミがタルキの上のリンゴを食べている時、ヒヨドリが近づくと、すぐ逃げ降り、地上に落ちた皮ばかりになったリンゴをつつく。他の野鳥がいなくなると、タルキの上のリンゴを食べる。そして庭に半日も夕方暗くなるまで居座っている。このような行動がかなりの日数見られた。



ギンザンマシコ

ギンザンマシコとアトリ

90年代で札幌近郊のナナカマドの街路樹にとりついて夢中になって実を食べた野鳥でレンジャクのほかにギンザンマシコとアトリが話題になった。

ギンザンマシコは1991年の12月の末から翌1992年2月の間、山の手バス通りのナナカマドの木を往来しながら、バス、自動車、通行人に関係なく朝から夕方まで、夢中になってナナカマドの実を食べ、また北風公園、庭のナナカマドにもやってきた。

ヒヨドリ、ムクドリ、レンジャク等の野鳥は木の実を

まるごと食べてしまうのに対し、アトリは中味の種子だけ飲み込んで果皮を吐き出す。1998年1月~2月の長期間、山の手バス通りのナナカマドの街路樹の下の雪の上に、アトリの群れの食べかすの赤い果皮が点々と落ちていた。そのアトリの群れが庭に来てリンゴを食べずに、シメ、シジュウカラ等が居間から5mの距離にあるボトルから落としたヒマワリの種子を食べていた。しかしボトルから直接ヒマワリの種子をとり出そうとしない。それでアトリ用にヒマワリの種子を15m離れた雪の上に撒いてやった。アトリの飛来の多い年は1988年と1998年の2年であった。

カラ類

居間からよく見えるツツジの間にヒマワリを作ると、成長・開花して、秋には結実する。秋から初冬にヒマワリに飛来する日数はシジュウカラが最も多く、次いで、カワラヒワ、ヤマガラ、シメの順になった。ところが1996年の秋、三角山が不作のためか、10月下旬からシジュウカラ、カワラヒワの常連ばかりでなく、ヤマガラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、まれにヒガラも混じって飛来した。また翌年の1月になってもカラ類とゴジュウカラが継続してボトルのヒマワリを求めて飛来した。

マヒワ

クルミの木は庭に来るヒヨドリ、ツグミ、レンジャク達のとまり木で、休んでいる間によく糞をする。マヒワは3月末から4月初めにクルミの下の雪の上、または地面の上をよくつついて餌をとる仕草が見られた。それはクルミの木にとまった野鳥が糞をした中に含まれていた種子ではなかろうか。1993年の3月から4月初めには9回も4～30羽の群れで飛来した。

イスカ

3年飛来したが、1998年4月には北風公園、私の家、両隣のN、Y両家の庭の松の木にとりついて食い違った嘴でまっぼっくりをこじあけて松の実を食べ、下にたくさんのマツカサを落としていった。

ハイタカ

庭の餌台に野鳥の飛来の多い時、ハイタカが飛んできて捕獲しようとする。1988年から1999年までの11年間で28回飛来し、実際に6回捕獲した。成功すると、雪の上、クルミ、オンコの高い枝、ブロック塀の上で30分以上もゆっくり時間をかけて食べ、食後30分から1時間くらい、クルミ等の木の高い枝の上でゆっくり休んだ後飛び去る。スズメが捕獲された時、ハイタカの飛び去った直後、群



スズメを捕獲したハイタカ

れで騒ぎ立てて1～2日くらい、スズメは餌台に近づかない。他方レンジャクはハイタカの飛び去った後、何事もなかったようにまたリンゴを食べに来た。

コウライキジ

1980年頃まで毎秋北海道農業試験場（豊平区羊ヶ丘）のトウモロコシの研究室からトウモロコシの穂軸の苞付きのものを貰い、2本ずつ苞を縛って、カイドウの枝、根曲り竹の又にぶら下げた。雪の積った1～2月に三角山から雄のキジが飛んできて、短時間でトウモロコシ1本をベロッと食べ、オンコの木の下のない穴の地面に隠れた。猫が雪の上のキジを見つけて追うと、後の猫を見ながらゆっくり一定の距離をとって歩き、近付くとパッと飛び立って逃げた。餌のトウモロコシが入手できない上に根拠地の三角山にもキジがいなくなった。

アカゲラ

アカゲラは脂身を食べに飛来するが、年により著しく頻度が異なった。姿が見えなくてもキョッキョットという特有の鳴き声で飛来をする。ある年の冬コンクリートの電柱の先端を5分以上も強くたたきつけて大きな音のドラミングをしていた。

キジバト

1987年の住宅の改築前には庭の3分の1ぐらい、野菜、バラ、ブドウ等を作っていて、5月に大豆を畑に蒔いた。発芽前にキジバトが飛来し、種子をほじくり出して食べた。仕方なく蒔き直した。

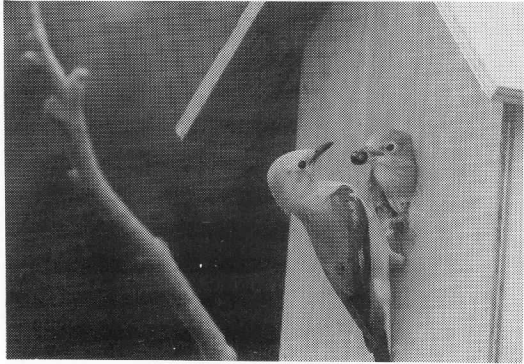
コムクドリ

コムクドリは4月中～下旬に庭に来て、レンジャクと一緒にリンゴを食べ、庭に設置した巣箱に入って番いで雛を育てる。この子育てのドラマを居間から見るために、1984年から、1987年の改築の年を除き、1999年まで毎春居間から見える位置に止り木と巣箱をつけた丸太を建ててきた。

コムクドリは年によって異なるが、大体5月中旬までに番いになり、5～10日間で巣を造り、メスが1日に1個づつ、4～8個の卵を産み終わると、日中メス、オス交替で、メスは夕方から朝まで抱卵する。ほぼ10～14日ぐらいで雛になり、若い雛が体温維持できるまで、日中メス、オス交替で餌を運びながら抱雛する。雛が成長すると、抱く時間が少なくなり、餌運びを多くする。雛は14～16日で顔を出して餌を貰い、2～3日後の6月下旬～7月上旬に巣立つ。

無精卵は1個のことが多いが、1999年は5個ともすべて無精卵だった。1997年は5卵中4個も無精卵で、孵化

した1羽の雛にメス・オスとも一所懸命に給餌したため、普通4～6羽の雛の場合は餌を求めて4～5日後から大きな声で鳴くが、1羽だけで充分の餌を与えられたので鳴かず、順調に成長し、16日に顔出し直後に巣立った。



コムクドリの親子

親鳥が抱卵・餌運び中に事故により失踪することが意外と多い。餌運び中、1984年にはオスが、1985年にはメスが失踪したが、幸いにも雛4羽が巣立つことができた。しかし、1984年の4羽目の雛はひ弱で、巣穴から半身をのり出してから5分後漸く飛び出すことができたが、すぐに地面に落下して猫に捕獲された。1992年には抱卵中先ずオスが、次いでメスが失踪して放棄された。

1988年と1994年とは番い形成後まだ定着しない時に驚かしたために放棄された。

以上、1999年はすべて無精卵により、1992年は抱卵中にオス、メスの失踪で、1988年、1994年は定着前に驚かしたため失敗した。結局11回繁殖に成功し、少ない時は1羽、多い時は6羽巣立って行った。

スズメ

スズメは非常に神経質だ。餌台にバラして与えていた稲の初がなくなった時、その代りに初をついた穂のまま餌台に載せるが、警戒してスズメが寄りつかない。1～2日後1羽のスズメがおっかなビックリ穂をくわえて運び出すと、他のスズメ達も追隨して運び出し、離れたところで食べる。一度学習した筈なのに翌年もまた同じことをくり返した。

スズメは餌台で食事中餌を落す。ボトルに入ったヒマワリの出口が判ると、面白がってドンドン種子を落す。シメ、カワラヒワに比べて下手だが、ヒマワリの種子を割って食べた。

餌台の高さは50cm前後で猫が飛び上がることができる。ある年の冬、3羽のスズメが餌を食べている時に猫が近づいてきた。2羽のスズメは気づいてすぐに飛び去ったが、残りの1羽はそのまま餌を食べ続けて、猫に捕まっ

てしまった。

毎年すぐ裏のK家のサクランボの木では下枝を切除するため、6月中旬高い位置に沢山のサクランボの赤い実が実る。1997年スズメが何十羽の群でサクランボを食べ、すべての赤い実がなくなるまで食べつくした。しかしその年以後サクランボの赤い実を食べていない。

カラス

毎年3月中旬になると、ハシブト、ハシボソ両カラスが庭のクルミの枝をちぎって巣材として運び始める。1997年の3月末、ハシボソガラスが隣のY家のクルミの木(私の家と同時期にブロック塀越しに並んで植えた)に巣を作った。丁度3本に枝分けした個所で巣は安定する。4月10日頃巣が完成し、産卵した後親カラスが交替で抱卵し、5月15日前後に3羽のひなが誕生し、親カラスが交替で給餌し、順調にひなが成長し、巣の上で飛ぶ練習をし、6月中旬に巣立った。しかしその後も親子のカラスが時々もとのクルミの木、近くの電柱に戻ってきて親カラスから子ガラスに給餌することが暫くの間見られた。

1998年、1999年もハシボソガラスが前年のY家のクルミの木の巣を壊して、また新しく巣を作り直したが、途中で放棄している。

クルミの実の熟す10月中旬から11月上旬の間、カラスはクルミの実をとりにくる。クルミの実を嘴でつついて穴をあけて落してしまったり、Y家の集合煙突の上、屋根根の上に運んで殻の中の実をとり出そうとする。クルミの木の下に落ちて採り忘れたクルミをよく探し出してもって行く。庭のアチコチ、20～30mも離れた道路の上にクルミの実が落ちているのはカラスの仕業であろう。

夏鳥と旅鳥

夏鳥の飛来は冬鳥の飛来に比べて少なく、年によっては来ない鳥もある。夏鳥の中ではノゴマとルリビタキが11月の中・下旬になっても庭に飛来したことがある。これは遅い渡りの途中であろう。1992年1月4日にはモズが来た。またハクセキレイは冬にも飛来することが多かった。1996年11月6日には旅鳥のマミチャジナイが飛来した。

その他印象に残った鳥

ツツドリ：1991年9月8日午後、居間の正面のシャクナゲを支持する竹竿の上に30分以上とまって休んでいた。

ヤマシギ：1996年4月25日、裏のブロック塀の近くのヒバの木の下で長時間潜んでいた。

オオルリ：1997年5月9日、まだ蕾の八重桜の木の間に動き廻っていた。

〒063-0002 札幌市西区山の手2条3丁目5-9

温根沼という穴場に迫る道路問題

高田 令子 (ニムオロ自然研究会)

根室半島の付け根に位置する「温根沼」。面積4.9km²の南北に細長い汽水湖で、周囲の大部分は森林に囲まれ、沼の開口部と最奥部には湿原が広がっています。野付風蓮道立自然公園の一部に指定されており、風蓮湖と同様に多様な自然環境が存在します。ガン・カモ類、シギ・チドリ類などの渡り鳥の重要な渡来地（中継地）でもあり、中でもオオハクチョウは最も多い時期に約2000羽、カモ類は数万羽という数が集まります。また、タンチョウ、シマフクロウ、オジロワシ、クマガラなど貴重種の繁殖地でもあります。タンチョウは、7つがい繁殖する大密集地。オオワシ、オジロワシは最盛期の2月頃、200羽以上が越冬するために集まります。その他にも、草原性・森林性鳥類も豊富。隣接地の「春国岱」があまりにも有名なため、ここ温根沼は鳥たちにとっても、バードウォッチャーにとっても格好の穴場といえるかも知れません。

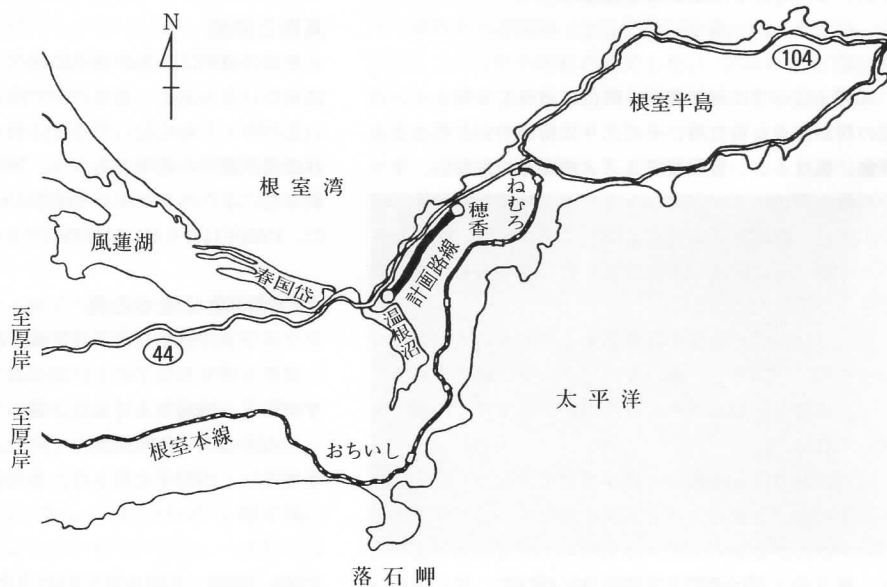
しかし、この温根沼にも道路開発という環境破壊の危機が迫っています。根室～釧路の高規格道路（時速100kmで走行可能な自動車専用道路）建設の計画があり、そのスタートとして、穂香（根室市街地の手前）～温根沼間約7kmの区間を平成12年9月にも着工させるというものです。

昨年3月に仕上がった環境影響評価書はわずかな調査によって評価されたものであることは明らかでした。まず、調査日数があまりにも少なすぎるのです。タンチョウの現地調査は平成6年と9年の計15日間しか行われていません。温根沼インターチェンジ予定地の近くで繁殖しているタンチョウが平成7年と8年にヒナを誕生させているのですが、なぜかその年には現地調査が全く行われていないのです。野生生物

を調査する上で絶対に欠かせない繁殖期前後の調査もほとんど行われていません。これは、シマフクロウの調査でも同じでした。また、しばしば観察されている貴重種、主に猛禽類がほとんどリストアップされていないこと。道路予定地上で生息が確認されているクマガラも評価書のリストには入っていませんでした。そして結果は、「影響を及ぼす可能性はあるが、道路予定地周辺には広大な生息環境があるので、道路建設による影響は少ないと思われる…」。すべてにおいて影響はないと評価されていたのです。年に数日間しか行っていない調査で、こ



タンチョウ



の多様な環境の何がわかるというのでしょうか。

もう一つ問題なのは、釧路までの全ルートが明らかにされていないことです。温根沼から先の第二期工事区域以降では、タンチョウやシマフクロウなどの繁殖地をともに通過する可能性があります。全ルート of 環境調査を行った上で環境影響評価をするべきです。問題の少なそうな場所から細切れに工事を進めて、後はなしくずしにされてしまうのではないかと考えてなりません。

私は平成11年2月に、知人らと「ニムオロ自然研究会」を発足させました。精確なデータを早急に集める必要があると考えたからです。活動内容は主に鳥類調査。数種



シマフクロウ

類の調査を定期的に行い、必要に応じて、データを公表していきたいと思っています。

本州では最近、オオタカ1羽でも計画が大幅に変更されていると聞きます。世の中がやっと自然環境の大切さを重んじ、保全という動きが見え始めている中、北海道はその自然の豊かさを軽視しすぎているのではないのでしょうか。

今回の道路問題でとてもつらいのは、肝心の根室市民が全く無関心であることです。賛成の声も、反対の声も無いのです。私たち一般の自然愛好家として出来ること、しなくてはいけないことは、まず自然環境の大切さを人々に知ってもらうこと…、なのかもしれません。

穴場という知名度の低さも、環境破壊の阻止すなわち環境保全を難しくしているのだとしたら、風蓮湖や春国岱と同じく根室の貴重な財産としての温根沼を広く世に知ってもらいたい…、そう思います。

〒086-0074 根室市東梅249-1

〈広報部註〉

ニムオロ自然研究会のさらなる独自調査で平成11年10~12月にかけて道路計画予定地上をタンチョウの親子が利用していることがわかり、平成12年2月17日に釧路開発建設部と協議し対応を申し入れたとの事です。

マガンの日本最北最大の中継地「宮島沼」の現状と課題

田 辺 至

I. ま え が き

宮城県伊豆沼等で越冬したマガンは、3月頃、生まれ故郷の北東シベリアめざして北帰を始めます。北海道美唄市郊外の宮島沼には3月下旬より姿を見せはじめ、沼の氷の融ける4月下旬には最大で47,920羽(1999年春)が沼周辺で休息と採餌をします。この沼はマガンにとり成田空港のように大切な存在です。その訳は、北帰のために宮島沼を発ったマガンは、どこにも寄らずにオホーツク海上を10時間で一気に995km移動し、2日半で2,048kmの渡りをして中継地のカムチャッカ半島中東部に着くからです。宮島沼の周辺で餌をとり十分な体力をつけた鳥のみが渡りを保証され、鉛中毒等で弱った鳥は途中で淘汰されます。

春には5千人を超える人が写真撮影、取材、吟行、探鳥のためにこの沼を訪れます。水鳥を見て心を癒す人は多いが、この沼と水鳥と沼周辺の農民が抱える問題を知人は少ないようです。ここでは諸先輩の調査を基に宮

島沼の現状と課題にふれ、皆様の御理解と御教示をお願い致します。

II. 宮島沼の現状と課題

1. 水鳥の鉛中毒死

日本で野鳥の鉛中毒が注目されるようになったのは、1989年春、この沼で33羽の白鳥の死が報道されてからです。白鳥やマガンの死は今も続いています。菌のない鳥は消化を助けるために、小さな石粒を飲み込む習性があり、その際、石粒と共に銃弾に使われた鉛散弾を飲み込み、鉛中毒死したことが分かりました。1989、1990年、行政側でこの沼に砂利をまくなどしたせいとか、その後、数年間、鉛中毒死は減りました。しかし、殆ど春に限られていたこの沼のマガンの中毒死が、1998年の秋に相次ぎ(10羽)、彼らはどこで鉛中毒になったのか注目されています。環境庁は平成12年度から地域を限って鉛弾の使用を禁止するそうですが、宮島沼がこの禁止区域に入

ているか不明です。解決策は鉛弾の全面禁止しかありません。

2. 水鳥による農作物被害

水田転作の麦畑の若芽がマガンが食べて被害を与えています。長年にわたり宮島沼とそこの水鳥の調査を続けている草野貞弘氏によると、マガンは麦芽より稲の落ち穂を好み、水田に落ち穂が充分あれば麦芽を食べることは少ないそうです。春のマガンによる麦の被害は、畑の雪融け直後と田耕しが始まって稲穂を食べられなくなった頃（北帰の10日位前から）発生します。草野氏は次のように提案しています。

- (イ) 麦畑に釣り糸を張って鳥の侵入を防ぐ。(効果があまり、美唄市では釣り糸を無償配布している。)
- (ロ) 春、水田の耕作が始まってからマガンの北帰するまでの約10日間、休耕田に稲穂をまく。
- (ハ) 水田の転作がマガンの餌の稲穂不足をもたらすので、休耕、転作田の一部を「マガンの餌用水田」として餌用稲作を特別に許可する。

行政側による農作物被害や餌場の調査は不十分であり、上記の提案の(ロ)について回答はありません。近年、東京大学の大学院生がこの問題の継続的な研究・調査をしています。マガンの主食の稲穂の不足に拍車をかけているのは、秋の水田での落ち穂の焼却と、水田の秋耕（落ち穂のすき込み）です。これらの中止に向けて、農家への協力の呼びかけが必要です。

3. 沼の鳥獣保護区化

沼周辺の住民（農民）の4団体は1995年、美唄市長に保護区反対を申し入れました。この中で4団体は水鳥による農業被害の救済策が示されないままでの保護区の指定に反対しています。北海道の担当者は「1996年を目途に宮島沼を国設鳥獣保護区にしたい。しかし、その前提として地元民の同意が必要である。」とっていました。1989年以降、北海道猟友会によるこの沼での銃猟自粛により、この沼は実質的な保護区の状況です。この沼の保護区の指定はまだありません。

4. 水鳥の一極集中とねぐらの移動

長く、この沼の水鳥の調査をしている星子廉彰氏と草野氏によると、1970年代の後半、この沼のマガンの数は4千羽前後でしたが、1984年には1万羽を越し、1986年に2万羽、1991年に3万羽、1995年に4万羽を超え、1999年春には過去最大の47,920羽になりました。面積約30ヘクタール、最大水深1.23mの浅く小さなこの沼へのマガンの一極集中を危ぶむ声がでています。一極集中は伝染病の「鳥コレラ」や「ガチョウベスト（ダルジー病）」

を広める恐れがあり、不忍池では多くのカモがサルモネラ菌の犠牲になっているそうです。

竹田津実氏は美唄市での講演の中で、『(小さな宮島沼に)マガンの3万羽(1993年のこと)は多すぎると思う。獣医の立場から、一朝事あるとこの沼の水鳥は全滅する可能性があると思われる。宮島沼の水質が悪くなっているというが、水質というのはある種の臨界点を超えると一気に死んでしまうから、(マガンの一極集中が)続くというのは大変問題があるような気がする。』とっています。日本雁を保護する会の会長、呉地正行氏は同じ会場で、この沼のマガンのねぐらの移動法について、次のような提案をしています。『(この沼のマガンの)全滅の危険を分散する意味でも、マガンのねぐらの分離が必要である。初めに、宮島沼以外のねぐらを探し、そこを人が妨害しないように(場合によっては目隠しをして)、鳥が安心してねぐらを取るような工夫をすること。次に、飼っているガン類を罠の形でその沼で飼う。そして、核になる飛べない鳥を数羽飼って、経過をみる方法も充分やってみる価値がある。』今も、この沼のマガンの一極集中防止策とねぐらの移動策はとられていません。

5. 沼の環境保全(水質等)

北海道公害防止研究所による1984年の水質調査で「宮島沼の水質は全リン0.053mg/l、全窒素1.2mg/lで栄養塩濃度は高く、クロロフィルaは12.6g/lである。化学的酸素要求量(COD)は10.5mg/lと高く、腐植質の富栄養湖である。」とされています。この沼の水質は小樽運河の水より汚れているわけです。その11年後の1995年夏のこの沼の湖岸の水質は、全リン0.17mg/l、全窒素1.7mg/l、CODは25.0mg/lと分かり、「ワースト時の釧路市の春採湖(かつては、全道一の汚れた湖。全国でも2~4位の汚れた湖でした。)なみの水質汚染」と大きく報道されました。その後は美唄市の委託を受け、道環境科学研究センターで毎月の水質調査を続けていますが、沼周辺の水田から入る農業用水による農業や環境



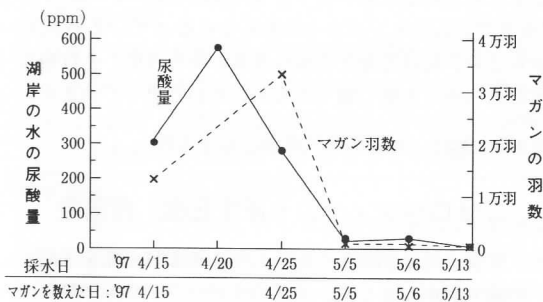
麦畑におじゃましてま〜す

ホルモンの調査はしていません。

春、この沼に集まる約8万羽(推定)の水鳥の排せつ物(尿酸)による水の汚染が心配されており、北海道衛生研究所は1997年に調査しました。それによると春の岸辺の水の尿酸量は下図のようで、一部ですが、水鳥のふんによる水の汚染が初めて証明されました。但し、沼の中心部の水では少し様子が違います。

この沼で水質悪化の指標の一つである水の華とアオコの発生を初めて認めたのは1997年の夏で、沼の突堤付近の水面に濃い青緑色の膜がはっていました。その後、毎年アオコは発生し、青緑色の膜が水面を覆う面積は次第に広がっています。この青緑色の水を道環境科学センターで同定してもらいましたところ、「アオコを形成するラン藻類の典型的な種が多く見られた。」とのことでした。もし、将来、この小さな沼にアオコが大発生すると、アオコの分解(腐敗)のために水に溶けている酸素が大量に使われます。その結果、沼の水の酸素不足で魚は窒息(酸欠死)します。そして、沼はドブ臭くなり、水鳥も寄りつかなくなるかも知れません。今、この沼の環境保全の対策は何もとられていません。

マガンの羽数と水中の尿酸量の関係 (1997年)



6. 沼の観察、調査の体制と施設、情報の発信

美唄市では沼のそばの個人の家をシーズン中だけ借り上げて、見学者の便宜を図っています。しかし、施設は不十分で、専任スタッフのいる設備の整った観察センターの建設が待たれています。行政側に調査体制整備の費用は少なく、観察センターの建築計画等もなく、沼の問題処理の体制も不十分です。1994年美唄市主催の「宮島沼を考える会」(市民各層の代表、学識経験者、農業団体、近隣町村の代表で構成)は、この沼の問題点の応急対策から将来への方向づけに及ぶ報告を出しました。

1999年、日本(宮島沼他)を含む6カ国で「東アジア地域ガンカモ類重要生息地ネットワーク」が結ばれました。情報交流に備えて、主な宮島沼の調査報告の英訳を

行政側はすべきでしょう。

この沼の定期的な情報発信は、草野氏(宮島沼の会)の執筆発行による「宮島沼通信」だけです。この通信が全国に伝えた情報の貴重さは計り知れません。

民間の星子、草野両氏の1970年以降の継続調査で、この沼の問題点は明らかにされました。行政側は後継の調査員の育成を図るべきでしょう。



群れの飛びたちは壮観だが一極集中の危機が…
撮影 長谷川 富 昭

III. あとがき

宮島沼の現状の悪化と対策の遅れ(特に行政側の)が大変気になります。同じ課題の解決を図りつつある先進県の取り組みに学びたいものです。多くの方がこの沼の現状を知り、御支援下さるようお願いしています。

IV. 参考文献

1. 北海道公害防止研究所「北海道の湖沼」北海道、1990年
2. 星子廉彰「ガンとハクチョウの生態」(自費)、1991年
3. たくぎん総研「宮島沼及びその周辺における水鳥類の動態食性等に関する調査研究報告書」北海道、1992年
4. 美唄市「宮島沼のワイズユース」美唄市、1993年
5. 宮島沼の会「宮島沼通信」(1994. 6～隔月刊)、1994年
6. 五十嵐聖貴他「宮島沼湖沼水における水鳥由来の尿酸濃度について」北海道衛生研究所、1997年
7. 草野貞弘「表とグラフで見る宮島沼の水鳥」、1998年
8. 田辺 至「宮島沼に発生したアオコ」(自費)、1998年
9. 牛山克己他「マガンによる小麦食害の発生機構」東京大学大学院農学生命科学研究科、1999年
10. 「第1回宮島沼を語る集い」(討議要旨)、1999年

〒072-0024 美唄市西1条南4丁目3-8

死体とおつきあいのいくつかの方法

佐藤 雅彦 (利尻町立博物館学芸員)

道に鳥が落ちている・・・。交通事故かな～。あなたがガラスであれば、久しぶりのごちそうとして召し上げるのもいいことかもしれない。もちろん、お墓を作って埋めてあげる心やさしき方もいることでしょう。でも、その鳥のことをもう少し知りたいとお考えであれば、次のようなおつきあいの方法もあるのです。

まず一番大切なこと。基本的に道に落ちているものはどんなものも素手で触ってはなりません。このことはどんな生き物でも鉄則です。野生生物はどんな感染症や寄生虫を持っているかあまりわかっていないからです。せめて軍手ぐらいいは常に持ち歩くようにしましょう(冬は手袋にもなるしね)。さて、最初は近くに落ちている木の枝などを探してきて「ツンツン」してみましょう。運がよければ、鳥に寄生するシラミバエ(国内では12属23種)を見ることができるかもしれません。捕まえて、じっくりとルーペで見れば、その扁平な体と頑丈な爪に驚くことでしょう!

次に鳥の名前を調べ、そして、羽や脚、いろんなところを眺めてみましょう。以前、ササゴイを拾った時のことです。お腹の部分のクリーム色のなにやら不思議な毛並みを見つけました。一緒に解剖してくれたAさんが「おおっ、これは粉綿羽ではないか!」と感動していました。粉綿羽は粉を出す特殊な羽毛で、水や汚れから体を守っていると本で読んだことがあります。その手触りは独特のもので、まさに触った人しかわからない不思議な感触でした。このように、どこかで読んだことがあるけど見たことがない、触ったことがないというものに出会える機会を、死体たちは私たちに与えてくれます。脚も脚輪がついていないかどうか必ずチェックです。おもしろい発見をしたら、ぜひ記録をつけましょう!見つけた場所や日付、状態など、スケッチしながら書き留めておくとよいと思います。

ところで、私は、小学4年生の時、初めて怪獣映画以外の洋画を見に行った時に映画館で飲んだ缶コーヒーの空き缶をいまだに持っていたりします。こういった性格の方、多分これまでの「おつきあい」では満足できず、「この死体、ぜひ標本にして人類の大切な財産として末長く保存・活用しておきたい」と思うこともありましょう。そんな時は、まず近くの役場や博物館などに相談してみてください。野生鳥獣の拾得届などの手続きや仮剥製の作り方などを教えてくれると思います。私の場合は

宗谷支庁に届けを出し、鳥のほとんどは仮剥製として博物館に保管するようにしています。今回与えられたページではとても仮剥製の作り方を詳しく紹介できませんし、言葉で説明するとかえって難しく感じてしまうものです。

一番よいのは博物館などで仮剥製の標本を実際に作らせてもらうことです(うちの館では希望者にはやってもらっています)。参考書としては以下のものがありますので、興味のある方は手に入れておくときっと役立つと思います。(橋本太郎、1979. 動物剥製の手引き。北隆館; 草野忠治ほか(編)、1991. 応用動物学実験法。全国農村教育協会。)

死体を拾ったり、標本を作ったりすることは、一部の方々からは眉をひそめられるようなことと見られがちです。しかし、標本から得られる情報によって生物や医学の基礎が作られてきました。また人間も生物である以上、その生と死を見つめるよいきっかけを彼らは私たちに与えてくれていると思います。死の現実味がない昨今、「生きていること」がよくわからなくなっている時代だからこそ、私は死体とおつきあいから「生」を自分なりにしっかりと感じ取ってもらいたいと思っています。

〒097-0311 利尻郡利尻町仙法志字本町

「サロベツ・ベニヤ原生花園」探鳥会

愛護会発足30周年を記念して1泊2日の旅を下記の通り計画しました。道北のサロベツ・ベニヤ原生花園探訪の旅に出てみませんか。シマアオジ、ツメナガセキレイ、ノゴマ等が見られることでしょう。

日 程：平成12年7月1日(土)・2日(日)

集合場所・時刻：大通り北側テレビ塔前

午前6時50分集合、7時発

(帰りは2日午後7時着の予定)

宿 泊：はまとんべつ温泉ウイング

☎ 01634-2-4141

定 員：45名

会 費：17,000円(当日申受けます)

締 切 り：定員になり次第

申込み先：蒲澤宅 Tel 011-663-9783

4月1日午前9時から受付

そ の 他：当日の昼食は持参して下さい。1日の夜、2日の朝、昼食は出ます。



鵜川河口でズグロカモメを観察

佐藤 ひろみ

1998年5月10・16日、勇払郡鵜川河口においてズグロカモメを観察したので報告します。

ひょんなことから鵜川河口のシギ・チドリのカウントデータをとることになり、この日も鵜川河口へ探鳥に出かけました。すると、な、なんとズグロカモメが2羽いるではありませんか。じっくりと観察することができ、16日にもいたのでカメラに収めることもできました。

1羽は写真にあるように不完全ながらも頭部が黒く、亜成鳥夏羽と思われます。もう1羽はまだ冬羽または若鳥のようでしたが近くには来なかったので撮影はできませんでした。また飛行時の翼下面の写真では黒い部分はユリカモメより小さく初列風切の半分ほどでした。

九州などでは多数が越冬しているようですが、「北海道鳥類目録」藤巻裕蔵、1998を見ると1976年10月28日湧

洞沼に次ぐ道内2例目の記録と思われる。

〒062-0934 札幌市豊平区平岸4-2-3-15. A-205



ズグロカモメ



ウトナイ湖にて

1999.11.7

青池道子

稚内から札幌に転居して1年余、2度目の秋を迎えた。稚内に居た時は地域柄、草原や水辺の鳥たちを見ることが多かった。こちらではヤマゲラ、オオルリ、イカルなど森林の鳥たちに会えて楽しいのだが、何となく水辺の鳥たちが懐かしくなった頃ウトナイ湖で探鳥会があることを知った。

当日、7時にわが家を出、バスを乗り継いでウトナイ湖に着く。白鳥が大きな身体を揺らせて餌をねだっている。そのまわりにオナガガモが群れている。稚内の早春、まだ河口が結氷して雪解け水が川に流れ出せない時期、低みにある広い牧草地は見渡す限り水漬く野となり幻の湖が出現する。白鳥や鴨たちがたくさん入る。つかの間の湖に集まる後頸の白い細い線が何とも優雅にみえたオナガガモが餌を争っている姿に、私の持っていたイメージは少し崩れてしまった。蒼い空に向って風に靡いているドロノキの葉裏は白く輝いて、この春見たキタコブシの花のようだ。傍らにツルウメモドキの実が爆ぜ、ハンノキにハシブトガラがぶら下がって餌を啄んでいるのが愛らしい。湖では白鳥が餌を採っている。まわりに鴨たちが群れているのはどうやら餌採りのおこぼれに与っているらしい。アメリカヒドリがいると聞き、あわててプロミナをまわす。目の後方の緑の光沢が美しい。対岸の

枯木立の上にV字飛行のチュウヒがいる、灌木の枝には胸が白く見える猛禽が止まっている、上空ではトビに混じってオジロワシが飛んでいると全部教えていただく。ベテランウォッチャーの方たちはどうやら猛禽の目をお持ちのようだ。

帰途、対岸にいたガン達が何に驚いたのか一斉に翔び立ってすぐおりた。ヒシクイとマガンの区別のつく近さだった。毎年9月には稚内から40分ほど南下した豊富な牧草地にたくさんのヒシクイが渡りの途中寄るのを見に行った。彼らも道北経由で来たのかな。故郷が少し懐かしくなった。バス停でやさしい声で鳴くシマエナガの群に会えた。このおだやかな自然環境がいつまでもあることを祈りつつ、帰途についた。

〒064-0944 札幌市中央区円山西町9-4-C3-306

〔記録された鳥〕ハジロカイツブリ、ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオタカ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オカヨシガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、カワアイサ、ハシブトガラ、シジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上26種
〔参加者〕青池道子、大賀 浩、成澤里美、清水朋子、西根昭吉・紀子、蒲澤鉄太郎・則子、松原寛直・敏子、小堀煌治、村田静穂、浪田良三・典子、中村 隆・廣子、山田良造、信田洋子、戸津高保・以知子、高栗 勇、吉田 功・美子、白澤昌彦、板田孝弘、栗林宏三、樋口孝城・陽子、藤谷節子、門脇俊憲、岩崎孝博、大高 隆・美知子・洋平・良子、松岡怜子、小山内恵子、山下 茂、富田寿一、井上公雄 以上40名
〔担当幹事〕樋口孝城、富田寿一

野幌探鳥会

1999. 12. 5 村上トヨ

今日はどうな出会いがあるのかしら？リュックにお弁当を詰めながら心はもう森の中を一人歩き。バードウォッチングは私にとっては新しい扉を開く様なもの。いつもドキドキワクワクさせてくれる未知の世界は今迄に経験した事がない。思いがけない事の連続。殊に入会させて頂いてからはお陰様で気の合う友人にも巡り会い、より一層充実した探鳥が出来る。同じ喜びのひと時を共有した感動は一汐だ。見たい会いたい様々な野鳥達について教えてくれる先輩達。その他、木々や草花の知識や情報等、私にとっては目を見張る物ばかり。自然の営みに感心するばかり。その感動を話し合える鳥見友達。帰宅後それをノートし楽しかった一日を振り返る。自分の気持ちが優しいと人にも優しくなれる。一石二鳥ではなく三鳥にも四鳥にもなる（トフじゃない？確かに）。

この日は曇天にもかかわらず多数の参加者が居て幹事さんの「嬉しい誤算です。」との笑顔の挨拶の中、久し振りにお会いする方も多く和気あいあいと言葉を交しながら雪中行軍？。時々前後から「今年はハリギリの実が少ないね。」「でもナナカマドやコクワはよく実を付けているよ。」「コブシも白い綿帽子の芽がびっしり付いていて来春楽しみだね。」等、様々な会話が飛び交う。心の中で「なる程。」と感心しながら歩く。ウルシの実によくキツキやカラ類等がぶら下がっているがかぶれたりしないのかしら？しかし顔やお腹を痒いている小鳥は見事がないし……。身体の中にどんな秘密兵器が隠されているのだろう、不思議だナァー。誰か教えて下さい。この日も小さな小さなクモが雪の上をモクモクと歩いている。「モシモシ、クモさん、どこから来たの？そしてどこへ行くの？」知りたいナァー。やがてやっとコゲラやハシブトガラ達が姿を見せてくれる。そして今日のメインイベントはオオアカゲラだった。しかし私にはひかひか確認する間もなく飛んで行った。また今度ゆっくり会おうね。寒さの為休息のみ、昼食抜き（ヒモジイノ）で出口へと急ぐ。早目の鳥合せ。すると最後に「今日は閑古鳥が鳴いていました。」とのユーモアたっぷりの先輩の報告に笑顔で解散。いつも楽しく優しい指導をして下さる幹事さん達。お疲れ様でございました。そして又来年もお世話の程、よろしくお願い致しますね。来年も良い出会いがあります様にノ今は鳥耳頭巾が欲しい私です。サンタさんにプレゼントをお願いして。

〒003-0022 札幌市白石区南郷通16丁目南2-9

〔記録された鳥〕コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ウソ、

ハシブトガラス

以上9種

〔参加者〕今村三枝子、高栗 勇、中正憲信・弘子、愛川 格・市子、武沢和義、小堀煌治、大町欽子、松原寛直・敏子・綾子、雪田昭治・久子、横山加奈子、浪田良三、板田孝弘、戸津高保、清水朋子、今泉秀吉、山田良造、信田洋子、村上トヨ、西永之恵、竹中悦子、堂向隆・洋美、速藤希尹子、山本昌子、大賀 浩、守野尚義・誼子、菅間慧一、吉田慶子、塚本富士夫、村上和子、大高洋平、大槻日出、井上公雄

以上39名

〔担当幹事〕中正憲信、井上公雄

最後の藤の沢探鳥会

2000. 1. 16 斉藤 ユキ子

1月15日の白鳥園野鳥観察会に参加させていただきありがとうございました。

白鳥園での観察会は長い歴史の最後の日と知りました。皆さまのなごりおいしい語らいの中、白鳥園のおばあちゃん手作りの大鍋ブタ汁、会員の方の差入れのおつけもの等おいしくておかわりさせていただきました。

天気にもめぐまれ、窓から見えるバードテーブルに飛びかう小鳥に感激・感動でいっぱいでした。ミヤマホオジロ・カケス・シジュウカラ・ヤマゲラ・アカゲラ。皆さまの声をかたむけ、名前は姿とバラバラ。でも楽しさは百倍。自然のくれたおくりものを寒さなど忘れて野外で観察。深い雪をこいで空をあおぎ探鳥しておりました。スキーで道をつけてくださった方に感謝致します。

これもみな、かわせみの会の岡部ご夫妻のおかげです。探鳥にいつも楽しそうに出かけられるおしどりのようなご夫妻に、野鳥の会のみなさまに、白鳥園のおばあちゃんとスタッフの方、本当にありがとうございました。

〒062-0932 札幌市豊平区平岸2条7丁目1-7

〔記録された鳥〕アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ウソ、シメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、コゲラ、ミヤマホオジロ

以上16種

〔参加者〕板田孝弘、松原寛直・敏子、横山加奈子、原橋 進・玲子、高栗 勇、橋本翠袖、矢野玲子、品川睦生、大高洋平、中正憲信・弘子、佐々木潤子、小堀煌治、勝見輝夫・真知子、新妻 博・登美子、清水朋子、岡田幹夫、雪田昭治・久子、久田伸一、樋口孝城・陽子、野口正男、村田静穂、佐藤幸典、国本昌秀・昇吾、村上トヨ、青池道子、難破茂雄、今野 弘、今泉秀吉、栗沢好恵、斉藤ユキ子、大町欽子、渡辺吉宗・好子、岡部誠一・美恵子、戸津高保・以知子、渡辺淑郎・静子、井上公雄

以上48名

〔担当幹事〕小堀煌治、井上公雄

「藤の沢探鳥会」30年を振り返って

小堀 煌 治

愛護会発足当時から約30年間続けてきた冬の藤の沢探鳥会が諸般の事情から幕を閉じました。

この探鳥会が始まった頃の藤の沢はすでに「小鳥の村」の藤の沢として、全国的にも名が知られていました。昭和31年に藤の沢小学校を中心に地域の児童の愛鳥教育を目的に小学校の南側の丘陵約9haを「小鳥の村」と名づけ、地域の人、学校、道庁などが協力して観察会、巣箱かけなどが始まりました。当時としては先進的な運動で、中心になって活躍したのが元幹事の故小沢広記さん。「小鳥の村の村長さん」として親しまれていた、小沢さんが自宅の庭に給餌台を設け一般にも公開しました。当時、給餌台は珍しく、しかも屋内のストーブの傍で村長さんの名解説を聞きながらの観察ですから、人気を博しマスコミにもよく取り上げられました。

愛護会の探鳥会は新年会の延長のような雰囲気です。白鳥園はいつも満員、50~70人くらい集まりました。昼休みにはアルコールで上機嫌の村長さんが皆の前で一席ぶつのが恒例で、村長さんは「ゴンベが種まきキャラズがほじくる」の世界の人ですからサンクチュアリよりも「鳥との共生」を大事にし、鳥の話も面白く聞かせてくれました。奥さんのユキさん心尽くしの豚汁や漬物も好評で「鳥よりもダンゴ」の人もいたようです。話に興が乗り、村長さんを囲んで延長戦になり薄暗くなるまで話が弾むこともありました。故柳沢会長も延長戦の常連でした。

あの頃は市内に給餌台が少なく、冬にあんなに鳥が集まる所はどこにもなく感動して観察したものです。古くから参加していた人はよく、「あの頃は種類も数も多かったのに今は少なくなった」と嘆きます。実は僕もその一人ですが、当時の野鳥だよりを見て驚きました。藤の沢探鳥会の記録が最初に登場するのが、昭和47年5月号です。50人参加で観察した鳥は8種類です。今年の探鳥会では16種類で、今年の方がはるかに多くの種類が出ています。人の記憶ほど当てにならないものはありません。観察記録の重要性を痛感している次第です。

残念ながら冬の探鳥会は無くなりますが、小鳥の村の重要性には変わり有りません。愛鳥運動の発祥地として大事にすべき所です。環境も空沼岳から峰続きで高山の玄関口のような所なのでノゴマやコマドリなど高山に渡る鳥達を観察できるし、クマガラも時々姿を見せます。西側の崖ではヤマセミやカワセミも繁殖しています。

小鳥の村は市内から近く、宅地化も進んでいます。開発の手が何時伸びてきても不思議ではありません。小鳥の村の自然環境を残すために観察データを示して、この地の重要性を説明しなければなりません。今年から冬の探鳥会を春の探鳥会に切り替えキチンとした観察データを残していかなければ、と考えています。

〒061-2283 札幌市藤野3条3丁目278

鳥民だより

◆総会のご案内

平成12年度の総会を次のとおり開催いたします。
多数ご参加ください。

日時 平成12年4月15日(土)
午後6時から
場所 札幌市民会館4号室
議題 平成11年度事業報告
同会計報告
平成12年度事業計画
同予算案 他



◆野鳥写真展の開催と写真募集

日時 平成12年5月9日(火)~5月28日(日)
場所 光映堂ギャラリー
札幌市中央区大通り西4丁目
Tel 011-261-0101

展示は5月8日、搬出は5月29日です。出展ご希望の方は写真をご用意ください。なお今年からはデジタルカメラによる写真も参加できます。スチール写真は4ツ切り、デジカメ写真はA4サイズでお願いいたします。

写真の送付先は光映堂の青山さん(住所は上記)まで。

◆新入会員、住所変更等は紙面の都合上、次号で紹介いたします。



☆探鳥会は、探鳥幹事を中心に行います。

野幌森林公園を歩きましょうの場合は、集まった方の中からリーダーを立てて行います。

☆余程の悪天候でない限り行います。

☆公共交通機関を利用される方は各自でお確かめください。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ちください。

☆探鳥会の問い合わせ

自然保護協会事務所 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日・祭日を除く)

4月9日(日)	野幌森林公園を歩きましょう	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分	
	夏鳥を心待ちにしながら早春の森を歩きます。カラ類のさえずりも盛んです。	
4月16日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分	
	そろそろ夏鳥第一陣の到来時季です。気の早い個体はやって来ているかも…。	
4月23日(日)	宮島沼	大富会館 午前10時集合
	中央バス(月形行) JR岩見沢駅前バスターミナル発 大富農協前下車 徒歩10分	
	北帰の途中、マガンたちが宮島沼に集結します。ほどよい雪融けに期待したいところ。	
5月5日(祝)	藤の沢	白鳥園 午前9時集合
	定鉄バス(定山溪線) 藤野3条2丁目下車 徒歩20分	
	今までの冬の探鳥会から初めて「春」に開かれます。どんな鳥がいるのかな?	
5月7日(日)	野幌森林公園	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分	
	オオルリ・キビタキたちのさえずりを聞きながら歩きます。ミズバショウも盛りです。	
5月14日(日)	千歳川周辺早朝探鳥会	駒場手前橋付近 河川敷小公園 午前5時集合
	(早朝のため公共交通機関はありません) 朝食の用意を忘れずに。	
	川に沿って歩く道は自然の宝庫。運がよければヤマセミに会えるかも。朝は寒いです。	
5月21日(日)	鶴川	JR日高本線 鶴川駅前 午前9時30分集合
	道南バス(浦河行) 札幌駅前バスターミナル発 鶴川農協前下車 徒歩5分(長靴の用意を)	
	シギはめっきり減りましたが、それでも河口を目指します。一昨年はツバメチドリが。	
5月28日(日)	野幌森林公園を歩きましょう	大沢口駐車場入口 午前9時集合
	夕鉄バス(文京台線) 新札幌駅発 大沢公園入口下車 徒歩5分	
	遅まきながらメボソ・コメボソムシクイが到着です。やっと夏鳥勢ぞろいとなりました。	
6月4日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線 植苗駅前 午前9時10分集合
	JR千歳線 植苗駅下車	
	草原の鳥が勢ぞろいしてお出迎えます。オオジシギのフライトを楽しみましょう。	
6月11日(日)	東米里	東米里小学校正門前 午前9時集合
	市バス(米里線) 東米里小学校前下車	
	昔の原野も宅地化されてきました。それでもがんばってる鳥たちにエールを送ろう。	
6月17日(土)	平和の滝 夜の探鳥会	平和の滝駐車場 午後6時30分集合
	市バス(西野平和線) 平和の滝入口下車 徒歩20分	
	遠くから聞こえるコノハズク・ヨタカの声も減ってきました。懐中電灯の用意をお忘れなく。	
6月25日(日)	福移	福移入口停留所付近 午前9時集合
	市バス(北札幌線) 福移入口下車	
	昔はたくさんいたシマアオジも98年は3番い、99年は1番いしかいませんでした。今年は来る?	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465